慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小幡甚三郎のアメリカ留学 : 福澤研究センター所蔵資料紹介
Sub Title	
Author	西澤, 直子(Nishizawa, Naoko)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1997
Jtitle	近代日本研究 Vol.14, (1997.) ,p.143- 163
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19970000-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

小幡甚三郎のアメリカ留学

――福澤研究センター所蔵資料紹介-

西

澤

直

子

はじめに

翻訳に携わった。大いに将来を嘱望されたが、アメリカ留学熟語集』(慶應四年)の編纂や、『洋兵明鑑』(明治二年)のと共に、日本で最初のイディオム・フレーズ集である『英文應義塾の一翼を担った人物である。義塾の運営に力を尽くす「小幡甚三郎は、福澤諭吉と同郷豊前中津の出身で、初期慶

た。

そらく明治初期留学生の多くが直面したであろう苦悩があっ環境や心境の変化の一端を知ることができた。そこには、おめとする関係資料六点を入手し、留学中の甚三郎について、めとする関係資料六点を入手し、留学中の甚三郎について、片的な情報が得られる程度で、詳しいことはわからなかっ(2)片的な情報が得られる程度で、詳しいことはわからなかっ(2)片的な情報が得られる程度で、詳しいこといった極めて断ら「甚さんはアメリカ…無事健康のよし」といった極めて断ら「甚

加えて、初期留学生の一姿を紹介したい。本稿では資料六点の全文を掲載し、でき得る限りの説明を

さで客死した。

今までアメリカ留学中の甚三郎については、

福澤の書翰か

中不幸にして神経を病み、滞米わずか一年余、二十六才の若

小幡甚三郎関係資料の詳細と成立経緯

まず資料の書誌的な情報をまとめておく。 福澤研究セン

ターが古書店より購入した資料は、以下の六点である。

(一) アメリカより甚三郎が次兄篤次郎にあてた書翰一

同 通(四月八日付 母および「皆々様」宛書翰一通(四月九日付)

(三)同

義兄三輪一彦義弟佐々木吉十郎宛書翰一通

(四) 入院先の病院医師による容体書一通 (和訳、一八七 (九月二十九日付)

(和

であろう。

全文は稿末に掲げた。筆者の責任において句読点を付し、

三年一月三十一日付)

(五) 通っていた学校長の篤次郎宛経過報告書一通

同年二月四日付

(一)~(三)は年の記入がないが、小幡甚三郎の渡航日程か (六) 兄姉妹宛篤次郎書翰一通(明治六年四月四日付)

子仕立てになっている。箱書きなどはないが、それぞれの書 ら考えて、明治五年しかあり得ない。 資料の形状は、(一)から(五)までで一巻、(六)で一巻の巻

翰の内容を踏まえると、もとは明治五、六年当時中津に住ん

直した。

篤次郎等が読んだ後で中津に回覧したと思われ、(三)は中津 アメリカから東京にいる篤次郎と母親の許に届いた書翰を、 高い)が保存していたものと考えられる。(一)および(二)は、 を考えれば、中津にいた甚三郎の姉か妹の家である可能性が

でいた親族の誰か(義兄義弟連名の書翰が含まれていること

にいる義兄と義弟にあてたもの、(六)は東京で甚三郎死去の

取った医師(フィラデルフィヤの神経病院医師ジョンス)に よる容体書と、甚三郎が通っていた学校の校長コックラン

欲しい旨が書かれているので、(四)(五)は甚三郎の臨終を看 ものである。(六)の書翰の中には容体書等を親戚に回覧して 報告を受けた篤次郎が、詳細を中津にいる兄姉妹に知らせた

のために篤次郎が和訳して、(六)の書翰に添えて送ったもの (David H.Cochran) の報告書を、英語の読めない兄姉妹

はなく片仮名に直した。また明らかな誤字については正しく 仮名の中に変体仮名を混ぜて使用している場合も、平仮名で い文字や、「し」と「シ」のようにくずしが極めて似ている りとした。しかし、「ヘ」や「リ」といった区別のつきにく 字体は新字体を用いた。平仮名、片仮名は原則として原文通 文字は、全体的な傾向から判断して片仮名を優先させた。片

の五人である。

婚)、次兄篤次郎、甚三郎、妹いと(佐々木吉従郎と結婚)

て混乱した可能性もあるので、どちらかの日付は誤って記さを書き直した跡があり、また当時日本は太陰暦を使用していの経過を考える方が自然である。(一)の書翰には何度か日付

書翰の内容からは、二者間には少なくとも一週間程度の時間

なお(二)の書翰の日付は(一)の書翰の翌日になっているが、

三 小幡甚三郎の履歴

れたものではないかと思う。

(一) 慶應義塾入学まで

知人達に相談した。

はないが、慶應義塾に入学したのは以下の事情であった。遂げず」とある。従って甚三郎が洋学を志した時期も定かでへ遊学の志あれども、時勢に故障多く家も亦貧にして其志を―著者註)の学校にて士族普通の教育を受けたり。常に他国

吉による「小幡仁三郎君記念碑誌稿」には、「同藩

(中津藩

転換も図った。いよいよ本格的な学塾運営を開始するにあした帳面。初期は姓名録と呼ばれた)を創設し、英学塾へのに入るの意。入学の際に年月日、生年月日、出身地などを記を貸し与えられた。翌三年春には「入社帳」(入社とは社中を貸し与えられた。翌三年春には「入社帳」(入社とは社中棟国した福澤は、築地鉄砲洲中津藩中屋敷内の五軒長屋一棟文久二年(一八六二)二度目の洋行であるヨーロッパから

江戸へ連れ帰ることができる優秀で堅実な青年はいないかとそこで元治元年(一八六四)三月母に会うため帰省した際、故郷である中津で有能な人材を発掘することを思い立った。たって、彼は是非とも自分の片腕となる人物が欲しいと考え、

福澤に会わないよう姿を隠してしまった。福澤は小幡孫兵衛亡くなり母一人となっていたため、江戸に出るつもりもなく、いたので、洋学を学ぶことには抵抗があった。また既に父がしかし篤次郎は漢学を学び、藩黌進脩館の教頭にまでなってしかし篤次郎は漢学を学び、藩黌進脩館の教頭にまでなった。

の実兄で、かつての師でもある服部五郎兵衛らに相談して

面会するを避けしが、伯母の宅にて図らず先生に邂逅し、 「余は一家の事情ニテ、上京し難かりしかば、努めて先生に 何とか篤次郎を見つけ出し説得した。篤次郎自身も後年、

即ち始めて東上」したと述べている。 戸にて書生の餓死せるを聴かずとて、強て勧めらるゝ侭に、

で福澤は、次男である篤次郎は養子に行かない限り、一生部 **篤次郎を説得したものの、その母親は難色を示した。そこ**

戸には養子の口も沢山あるから、是非江戸へ出すべきである 屋住みの身である、前途有望な青年がそれでは可哀想だ、江

江戸へ拐してきたのだと語っていたらしい。そして弟の甚三 と母親を説得した。福澤は後に笑いながら、養子の口を餌に

郎も、この時篤次郎と共に江戸へ出て、慶應義塾に入ること

郎の希望であったのかははっきりしない。石河幹明の『福澤 甚三郎の江戸行きが、福澤の意志によるものなのか、 甚三

兄弟二人とも連れ帰ることにした」と書かれている。しかし 前述の「小幡仁三郎君記念碑誌稿」には、甚三郎自身の意志 ら次男の方も江戸にお出しなさいと説き、母堂の同意を得て 更に、養子の口にはもう少し若い方がよいという者もあるか の少年がある。先生は此少年をも一緒に連れ帰ろうと思い、 諭吉伝』には、「ところが篤次郎の弟に仁三郎という二十歳

わかっている。

初期の慶應義塾では塾長職が確立していな

の慶應義塾三田移転の際は一切を取り仕切ったと言われてい かったため、正確な在職期間はわからないが、明治四年三月

で「君も亦兄と共に行んことを欲し、親戚これを止むる者多

る竹下郁蔵の周旋で、ようやく江戸行きが決したとなってい いずれにしろ彼は、元治元年六月に兄篤次郎、 服部浅之助

けれども、其志願益切にして止まず」出発前日に叔父にあた

る。

伴われて江戸へ上り、慶應義塾に入社した。 小幡貞次郎、浜野定四郎、三輪光五郎の五人と共に、福澤に

(二) 幕府開成所出仕と塾長就任

年目にして前述のイディオム・フレーズ集を編纂した。また 生活面でも「青年の書生、或は遊惰放蕩に流る可きの恐なき では二年もたたずに自力でよく英文を解するようになり、四 に非らず」風紀が乱れる傾向もあった塾内を、彼の「気力と 入社した甚三郎は、福澤の力強い協力者となった。学問上

甚三郎が「同手伝並出役」で五人扶持金二両の記録がある。 た。篤次郎が「開成所英学教授手伝出役」で十人扶持金五両 六)十二月には兄篤次郎と共に、開成所への出役を命ぜられ 甚三郎の語学力は塾外でも評価され、慶應二年(一八六 また明治三年(一八七○)には塾長の任務にあったことが

正実」によって正しい「教風」に導いた。

146

二十日の福澤英之助宛福澤書翰には「昨日アメリカより手紙

参、殿様も甚さんもぶじ、ソルレイキと申処迄参候よし」と

あ る。<u>î</u>î

以下資料から、

留学生活の様子を追ってみる。

なお前述の

から誕生した教員養成学校)の校長をも務めた人で、何より

整へ、外は会計の事務を弁じ、普請には自から大工職人を督 る。 片時も休息あることなし」とその時の活躍振りが書かれ 前掲 転居には自から車力人足〔を〕使役し、西に駆け東に走 「小幡仁三郎君記念碑誌稿」に「内には教授の方を

兀 アメ リカ留学

ている。

慶應義塾において福澤の片腕として活躍していた甚三郎が (一) アメリカ留学へ

アメリカへ留学することになったのは、 旧中津藩主奥平昌邁

時の藩主であった。彼は、明治三年十一月に旧諸侯華族の東 随行者に選ばれたためである。 奥平昌邁は、宇和島藩伊達家から養子にはいった明治維新

塾に入社した。福澤はまだ十七才の若い昌邁に、アメリカ留京移住が命ぜられると、上京して慶應義塾内に住み、慶應義 四年十二月末二人はアメリカに向け出発した。明治五年二月 学を勧め、その随行者として甚三郎を推挙した。そして明治

> を併記した。 暦でわかっている年号は西暦を表記し、和暦については西暦 ように、 明治五年は和暦はまだ太陰暦であるため、 便宜上西

がら、明治五年(一八七二)の三月初旬には、ひとまず留学 ソルトレイクシティからシカゴまでは岩倉使節団と同道しな

四月八日の書翰によると、奥平昌邁と小幡甚三郎

ίţ

先のコネティカット州(Connecticut)ウィンチェスター (Winchester) に着いた。ウィンチェスターは州の北西部に

あり、リッチフィールド(Richfield)丘陵の湖と森林の

着いたのは家数二~三十軒ばかりの地区で、あまりに「田 域である。一七七一年には町制が敷かれた。しかし、二人が

割り算を学んでいるクラスが最上級で、英語とてリーダー ノ有様」であった。しかも生活に不便なだけでなく、算数は

たせいではないかと述べている。 かった。甚三郎は留学費用を年間五~六百両と安く見積もっ 素読に困るレベルでは、とても勉学に適した環境とは言えな

リン(Brooklyn)でプライベートレッスンを受けた後 そこで三月下旬には早々にニュー ヨークへ戻り、ブル ッ

れる。校長のコックランは normal school(一八二〇年代(3) Institute は工業に関する諸技術や科学を学ぶ学校と思わ Polytechnic Institute で学ぶことに決した。Polytechnic

をはかってくれていたので、甚三郎も漸く腰を落ち着けるこ も「日本へ学問ノ要用ナルコト能ク承知」し留学生達に便宜

とができた。

年怪我により帰国)を始め、何人もの日本人が学んでいた。 なるため一八七〇年八月からブルックリンで学ぶ、一八七三 既にニューヨークでは、華頂宮博経(東隆彦、海軍軍人と

松田晋斎 松山出身。慶應元年(一八六五)四月慶應 高遠らと親交を結んだ。彼らの略歴は次のようなものである。 その中で甚三郎は、松田晋斎、竹村謹吾、佐藤百太郎、江木

国後は工部省工学寮少師などを勤める。訳 ため、藩もしくは旧藩主の費用で渡米。帰

義塾入社。一八七一年工学系の学問を学ぶ

書に「清英交際始末」。

佐藤百太郎 国するが、すぐに公費留学、経済学を学ぶ。 嘉永六年(一八五三)佐倉生まれ。順天堂 ンフランシスコへ赴く。一八七一年一度帰 夫人から英語を学ぶ。一八六七年私費でサ 二代目佐藤尚中長男。横浜で宣教師ヘボン

出を始めた。

八年(一八七五)には狭山茶の米国向け輸

八七六年帰国後は大蔵省出仕。また明治

江戸出身。甚三郎は「駿府ノ人」と書いて ため、私費で留学。 いるので、幕臣か。一八七一年英語を学ぶ

竹村謹吾

福山出身。福山藩儒江木鰐水の子。一時高

江木高遠

戸家へ養子となる。大学南校・東校で学び メリカに初渡航。軍事を学ぶ。一八七三年 一八七〇年八月華頂宮博経の従者としてア

帰国。一八七四~六年再び渡米、コロンビ

ア法律学校で学ぶ。帰国後外務省出仕。一

ストル自殺。専修大学の設立にも関与した。 八八〇年三度目の渡米時、冤罪に抗議しピ

他の三名は甚三郎より一寸早く、一八七〇年の後半から一八 ているように、すでに約四年の滞米生活を経験していたが、 四人の中では佐藤が、甚三郎も「当国久シクアル人」と書い

換をするにも好都合で、話も合ったのだろう。小幡篤次郎の 七一年にかけて渡米した先輩であり、学問や生活上の情報交

き添って、甚三郎のために力を尽くしてくれている 江木は何くれとなく面倒をみてくれ、特に江木は最期まで付 書翰を見れば、甚三郎が体調をくずしてからも、松田、佐藤、 男になるだろうとか茶化してはいるが、閉口したようである。

タトキ」のように立ち振る舞いや身嗜みに気をつければ、色

留学生活には経験しなければわからないことも多かった。

またコックランの書翰を読むと、当時の日本人留学生達は、

まさに寝食を忘れて学問に没頭していた。彼は、

日本人留学

(二) 留学生活

とも多く、本を翻訳する際には実際に経験した人に確かめるかっていたつもりでも、実際に経験してみるとわからないこ四月八日付書翰の追書で甚三郎は篤次郎に、本で読んでわ

四月九日の書翰によれば、甚三郎はしばらく奥平昌邁とはろう。

方がよいとアドバイスしている。留学生活から得た実感であ

よ寄宿生活は長く続いた。るので、奥平が途中で合流した可能性もあるが、いずれにせが、九月二十九日の書翰にも「不相変医者ニ修業仕候」とあ

奥平と離れるのは長くても二週間くらいと書いている

華頂宮博経の知り合いの医師宅で寄宿生活を始めて

になるだろうとか、「若イ江戸ノ御嫁さんカ御嫁入リテモシ比べれば衣服も頻繁に替えねばならず、少しは肥満して健康をあらったり、日に何度も髪をとかしたり、日本にいる時に違いに戸惑った。肉類ばかりの食事内容やマナー、石鹼で体をの中で甚三郎は、言葉もさることながら、彼我の習慣の

またおそらくは体を動かすといえば、刀の素振りぐらいだっ要さを説いた。しかし、留学生達の上達したい一念は強く、康を維持するため、適度に運動し十分に睡眠をとることの重学んでも病気になってしまえば元も子もないので、身体の健生達が勉学に熱中するあまり体を壊すことを心配し、いくら

え、決死の覚悟であっただろうから、学問に熱中するのは当何としても西洋の学問を学ばねばならないという使命感にもあろう。日本を立つ時には、これからの日本を担うために、た彼らには、適度な「運動」という観念も持ち難かったので

ところで、今まで甚三郎の学んだ学校は、ワックスマン博度が過ぎ、体調を崩し精神に変調を来していった。

然かもしれない。殊に甚三郎の場合は、悲壮なまでにその思

いが強かった。篤次郎の書翰によれば、十一月頃から勉強の

発し発狂したと書かれている。しかし果たして日本において甚三郎が十二、三才の児童に混じって学業が進まず、脳病を校に入り修業」したが、日本において「有名の学者」である井研堂の「明治事物起源続録(七)」には、「新約克近方小学いことは判明していたが、どこであるかは不明であった。石士の報告によって、当初言われていたラトガース大学ではな

ブルックリンで勉学を開始することになった経緯や、初めプ校に入学したというのは腑に落ちなかった。今回の資料で、開成所に勤務し、前掲のような著訳書もある甚三郎が、小学

学し、在学生のまま亡くなった事実が明らかになった。ライベートレッスンを受け、後 Polytechnic Institute に入

(三) 発病と進行

表うに通じず、しかも大名のお伴だったから気配りをし過ぎょうに通じず、しかも大名のお伴だったから気配りをし過ぎる。四月八日の書翰では、初めての異国の地で「インターブう。四月八日の書翰では、初めての異国の地で「インターブら。四月八日の書翰では、初めての異国の地で「インターブら。四月八日の書翰では、初めての異国の地で「インターブら。四月八日の書翰では、初めての異国の地で「インターブら。四月八日の書翰では、初めての異国の地で「インターブら。四月八日の書翰では、初めての異国の地で「インターブら。四月八日の書翰では、初めての異国の地で「インターブ

発前は年間五~六百両と見積もっていた費用が、余程倹約し発前は年間五~六百両と見積もっていたところをみると、逆に言えばそれまでは不調や不満をむらして、甚三郎の気苦労も絶えなかったに違いない。もらして、甚三郎の気苦労も絶えなかったに違いない。もらして、甚三郎の気苦労も絶えなかったに違いない。もらして、甚三郎の気苦労も絶えなかったに違いない。

て少し疲れただけだと言い訳している。次便では立派なアメ

は「少しク決断ニ乏し」いと自評していた彼にとって、大き活上の問題や金銭的雑務もこなさねばならない状況は、自分ても八~九百両はかかることがわかった。勉学に加えて、生

な精神的負担であったに違いない。

の楽しみを味わいたいと願っていたことが書かれている。の楽しみを味わいたいと願っていたことが書かれている。な甚三郎が生前語っていた話として、日本を立つ前に兄や従いて、四月九日付では親族達皆の様子や、正月に行ったであいて、四月九日付では親族達皆の様子や、正月に行ったであいて、四月九日付では親族達皆の様子や、正月に行ったであいて、四月九日付では明治四年末に開校し、兄篤次郎が校長となって赴任した中津市学校につい業しみを味わいたいと願っていたことが書かれている。

ルックリンまで知らせた。しかし体の衰弱は烈しく、遂に明な引受け、パトンなる商人が手段を講じて毎日の病状をブなってからは、費用は高くても構わないから最良の治療を受なってからは、費用は高くても構わないから最良の治療を受なってからは、費用は高くても構わないから最良の治療を受なってからは、費用は高くても構わないから最良の治療を受なって、次第に甚三郎の神経を圧迫していった。具合が悪くあって、次第に甚三郎の神経を圧迫していった。具合が悪くあって、次第に甚三郎の神経を圧迫していった。具合が悪なりを引受け、パトンなる商人が手段を講じていた。

治六年(一八七三)一月二十九日に亡くなった。入院後の病

Jersey)ニューブランスウィック(New Brunswick)の墓地(Willow Grove Cemetry)内の、日本政府が所持している(16)

状は容体書に詳しい。二月二十一日ニュージャージ州(New

(四) 甚三郎の訃報

甚三郎死去の知らせは、四月二日に東京に達した。 篤次郎は衝撃を受け、早速甚三郎に付き添っていた江木高遠の父江は衝撃を受け、早速甚三郎に付き添っていた江木高遠の父江は衝撃を受け、早速甚三郎に付き添っていた江木高遠の父江は衝撃を受け、早速甚三郎に付き添っていた江木高遠の父江は衝撃を受け、早速甚三郎に付き添っていた江木高遠の父江は衝撃を受け、早速甚三郎に付き添っていた江木高遠の父江は衝撃を受け、早速甚三郎に付き添っていた江木高遠の父江は衝撃を受け、早速甚三郎に付き添っている時のが

郎の嘆きはいかばかりであったか。中津の兄姉妹宛書翰には、みに加えて、母親を何と慰めればよいのかもわからず、篤次遂に亡くなったという訃音が書かれていた。弟を失った悲し、夜も眠れず、何ひとつ心を慰さめるものがなくなって衰弱し、そこには、正月以来甚三郎の精神状態が極度におかしくなり、ところが、同日午後奥平昌邁および高遠から書翰が届き、ところが、同日午後奥平昌邁および高遠から書翰が届き、

身に付けてこれからというときに亡くなってしまった無念さ

幼少の頃から虚弱だった甚三郎がやっと健康になり、学問も

ついて「何分明精認め不得」、文面から推読して欲しいとの「千百倍も勝」ると自らを慰めてはいるが、甚三郎のことにが述べられている。長生きする「悪しき弟」を持つよりは

福澤は、箱根で甚三郎の死を知り、直様帰宅した。言葉に篤次郎の心中が察せられる。

四月十

五日付島津復生宛書翰で次のように述べている

移したり、仮に西洋の籍に入ったり、外国公館の雇人の証明西洋人には手を出すまいと考えて、外国人居留地に住まいをることを恐れた洋学者達は、官軍が暴力的であったとしても一つのエピソードがある。戊辰戦争の時、戦禍に巻き込まれーのエピソードがある。戊辰戦争の時、戦禍に巻き込まれ

書を入手したりした。慶應義塾のことも心配してくれる人が

謀った。すると甚三郎が塾の広間に走り出て「顔色を変じ目 あり、 証明書を届けてきたので、福澤はどうすべきか皆に

文を事としていて戦争には関係ないが「内外の分は未だ之を、を瞋らして」塾内の人々を前に、これは内戦である、自分は

忘れず」(傍点は福澤原文のまま)、西軍が凶暴であろうとも

よりは、日本人の刃に死ぬべきである。「我輩が共に此義塾 がら、報国の大義を忘れて外国人の庇護下に入り難を逃れる これを防ぎ、力足らざる時は唯死あるのみ、日本人でありな 東軍が無法であろうとも、自分に害を加えてくるならば自ら

を創立して共に苦学する其目的は何処に在るや、日本人にし

以て我国権を皇張するの一点に在るのみ」、一身独立という も発することができなかったといわれる。福澤はこのエピ その「語気凛々、決する所あるが如し」態度に、人々は一言 大義を忘れれば、我義塾の命脈を絶つことになると演説した。 て外国の書を読み、一身の独立を謀て其趣旨を一国に及ぼし、

間もない明治十五年三月二十七日時事新報寄書欄に載せ、 「之より社中の気風益固結して曾て動変することなく」、「仁 (甚―著者註)三郎君の一言亦重しと云ふ可し」と評してい

ソードを、「故社員の一言今尚精神」という題で、創刊して

福澤は後々まで彼の死を惜しみ、慶應義塾は気品の泉源智

る。さらに福澤全集緒言においても、この話を繰り返し述べ

身要領』制定の際にも、小幡甚三郎と小泉信吉とが生きてい 徳の模範たるべきと唱えた有名な演説の際も、物故した名士 の筆頭に彼の名を掲げ、また明治三十三年(一九〇〇)『修

だが…と嘆いた。 (30) てくれたら、こんなとき相談相手として一番たよりになるのてくれたら、こんなとき相談相手として一番たよりになるの 福澤が記した前掲「小幡仁三郎君記念碑誌稿」は次のよう

に結ばれている。

嗚呼、君を思へば君のために君の死を悲み、我学問の道 筆の拙なると碑の文面に限あるとに由り、思て云ふこと 君の言行を記して後日の記念に供せせんとすれども、唯 緒百端止めて止まらず、爰に社中の旧友相謀て碑を建て ために君を失うを患う。強て自から慰めんとすれども愁 を思へば道のために君なきを歎じ、天下を思へば天下の

おわりに――小幡兄弟への期待

明治六年四月廿三日、君の親友福澤諭吉、慶應義塾社中

能はず記して尽すこと能はざるを恨むのみ

の差図に従い涙を払てこれを記す。

Ŧi.

うとする考えであったが、いまとなって考えると本来身体の 福澤は、「仁三郎を推挙したのは学問、人物を大成させよ して「一身独立」のために必要なのは、

西洋文明の理解であ

経済的な力であると考えた。明治三年(一八七〇)に中

人々が「一身独立」することが必須であると考えていた。そ

(A) 大失策で、わざわざ殺しにやったも同様だ」と悔恨したとい 大失策で、わざわざ殺しにやったのはかえすがえすも自分の が出てなかった彼を外国にやったのはかえすがえすも自分の

て…」という一件があったことにも一端が窺える。(22)里霧中なんかんと、何か心配さうに話すから、私は之に答え 役達の云ふに、藩はドウしたら宜からうか、方向に迷つて五 処に出て居る。(中略)夫れから私が其処に出席すると、重 るが、明治三年の帰郷の際 十一巻、「天保義社に関わる新収福澤書翰(鈴木閑雲宛)」 島津復生宛福澤諭吉書翰を中心として―」『近代日本研究』 告しているので(「奥平家の資産運用と福澤諭吉―新資料 既に、奥平家および中津士族への福澤の尽力について若干報 の指標を与えてくれる最も頼りになる存在であった。筆者は 藩主奥平家をはじめ中津の人々にとっては、福澤はこれから れて行た。所が藩の役人と云ふ有らん限りの役人重役が皆其 かうではないかと云ふやうなことになつて、家老の邸に呼ば 『近代日本研究』十三巻)、ここで繰り返し述べることは避け 福澤は、日本が旧体制から脱却し近代日本を築くためには 奥平昌邁の随行者は彼をおいて他にはいなかった。 「福澤が東京から来たから話を聞

> 学の必要性を強調している。 (3) 津の人々にあてて記した「中津留別之書」では次のように洋

の着眼、皇漢洋三学の得失を問はず、独り洋学の急務なの着眼、皇漢洋三学の得失を問はず、独り洋学の急務な独立を燿かし、始て真の大日本国ならず哉。是即ち我輩と云ふ可きなり。(中略)是時に当て外人の憚るもの霊と云ふ可きなり。(中略)是時に当て外人の憚るもの霊と云ふ可きなり。(中略)是時に当て外人の憚るものこ、世界の公法を以て世界の公事を談じ、内には智徳をじ、世界の公法を以て世界の公事を談じ、内には智徳をじ、世界の公法を以て世界の当を読に従て徳を脩め、人は万物の霊なりとは、唯耳目鼻口手足を具へ言語眠食人は万物の霊なりとは、唯耳目鼻口手足を具へ言語眠食人は万物の霊なりとは、唯耳目鼻口手足を具へ言語眠食

葉が次のように語られている。された「中津市学校之記」には、留学にあたっての昌邁の言ると考えたのだろう。福澤が原文を考え、奥平昌邁の名で出学を学ぶ素地をつくるには、昌邁が自ら手本となるべきであ

めた理由は、昌邁自身のためは勿論のこと、中津の人々が洋

福澤が、旧中津藩主である奥平昌邁に、アメリカ留学を勧

るを主張する所以なり

度独り外国に遊学すれとも、旧藩内の士民も余か志を助 独り事を為すハ、衆と共にするの楽しさに若かす。余此 註

費し、旧藩士の積金に合して父学の資と為し、此度中津 け、余か学ぶ所の道を学ばんとするは、固よりこれ願ふ か微意を体して勉強いたし、三五年の後余も亦外国より の議を決したれは、旧藩の士卒族は勿論、百姓町人も余 に一処の洋学校を開き、其外当県内の諸方に郷校を設る 所なれは、本県吏人に謀りて、年々家禄の内五分の一を

この福澤の意図を理解し、助力してくれるのは小幡兄弟をお いて他になかった。福澤は小幡兄弟に絶大な信頼を寄せてい

なり。(句読点は筆者) 帰り、互に学業上達の

互に学業上達の上再会いたすへき事今より楽む所

に任せたのであろう。

たので、兄篤次郎には市学校を任せ、昌邁の留学を弟甚三郎

まった。誠に残念と言わざるを得ない。(25) の域ニ進メヨ」といった一途さが徒となり、神経を病んでし 風改ラざれハ真の開化ハ入り難し」「淫風を一掃し真の開化 の優しさや、「亜細亜之国風淫風盛ニして人誠実ならす。此 丁寧に応対し周囲を驚かせたというエピソードをもつ甚三郎 ところが、当時賎民視されていた雪駄直し屋に対しても、

> (1) 小幡甚三郎の著訳書として知られているのは、 次の五点で

ある。

氏六角砲」の説明と操練法。ン氏野戦砲」および「ホワイトオルス浜野定四郎との共訳。「アルムストロ浜野定四郎との共訳。「アルムストロ	明治三年	『新砲操練』
なったと言われる。を考書となったと言われる。と言われる。	明治三年	『西洋学校軌範』
を列記したもの。下土官以下の者に対する軍艦内の刑罰	明治二年	『英国軍艦刑法』
of War』を翻訳したもの。 War』を翻訳したもの。	明治二年	『洋兵明鑑』
理して出版したと言われる。	慶應四年	『英文熟語集』

参考文献 富田正文『福澤諭吉襍攷』(三田文学出版部、一九四二年)

3 (2) 明治五年二月二十日付福澤英之助宛書翰。 (岩波書店、一九五四年) 一七巻一二四頁: 甚三郎は十二月五日の生まれで、西暦では年が明けて一八 『福澤諭吉全集』

四六年になる。通常天保十三年生まれの兄篤次郎とは三才違い

は甚三郎で統一した。 使っている。本稿では後掲の書翰の関係もあり、資料の引用以外使っている。本稿では後掲の書翰の関係もあり、資料の引用以外になる。また名前について、福澤は維新後でも仁、甚両方の字をと表記されるが、篤次郎は六月八日生まれで西暦では一八四二年

会社、一九七三年)一七頁。 参考文献 今田見信著作集二『小幡英之助先生』(医歯薬出版株式

- (4)「小幡仁三郎君記念碑誌稿」は『福澤諭吉全集』二十一巻三
- (5)『慶應義塾五十年史』(慶應義塾、一九○七年)二八七頁。八五~八頁に掲載されている。

(6) 石河幹明『福澤諭吉伝』(岩波書店、一九三二年)四二三~

- (7) 前掲「小幡仁三郎君記念碑誌稿」。
- (8)『福澤諭吉全集』二十一巻二九〇頁(^) 前排 仏帆任三良君言悉仰訳釈」
- 資料室、一九八十年)。 (9) 『慶應義塾歴代役職者一覧(増補版)』(慶應義塾塾監局塾史(8) 『福澤諭吉全集』二十一巻二九○頁。
- (1) 『福澤諭吉全集』十七巻一二四頁。センター編集、慶應義塾発行、一九八六年)。
- 一九七三年)。 (15) 『世界地名大事典4アメリカ・オセアニア一』(朝倉書店、
- の資料の有無については現在問い合わせ中である。 エ科大学)ではないかとの御教示をいただいた。同大学のホーブルックリンにある現 Polytechnic University(ブルックリンブルックリンにある現 Polytechnic University(ブルックリン)の資料の有無については現在問い合わせ中である。

一九七七年)。 法也、池田稔共訳『アメリカ教育文化史』(学芸図書株式会社、R.F.バッツ、L.A.クレメン著、渡部晶、久保田正三、木下

7日義久『明台こ生ぎご左會審争かりの人々』(最毎1))『慶應義塾入社帳』復刻版一-一五七頁。

16) セルマン・A・ワックスマン「小幡甚三郎の墓」『三田評九七年)。『幕末明治海外渡航者総覧』(柏書房、一九九二年)。内田儀久『明治に生きた佐倉藩ゆかりの人々』(聚海書林、一九

富田正文「小幡甚三郎の死―ワックスマン博士の寄書について論』五五七号(一九五三年)。

16) 福井藩からの留学生としてラトガース大学に学び、卒業ま―」『三田評論』五五八号(一九五三年)。

一八七○年日本領事館が買い上げた墓所。であと一ヶ月で結核に倒れた日下部太郎の遺体を葬るために、

の近況については、山内慶太「アメリカに小幡甚三郎と馬場辰墓地の近況―」『三田評論』七八四号(一九七八年)。また墓所参考文献「石井隆「ラトガース大学に使いして―小幡甚三郎先生

岩波書店、一九五六年)一一三頁。(17)『大日本古記録』「江木鰐水日記(下)」(東京大学史料編纂所、猪の墓所を訪ねて」『福沢手帖』九十五号(一九九七年)。

- (18) 『福澤諭吉全集』十七巻一四五~六頁。
- 富田正文『考証福澤諭吉』上(岩波書店、一九九二年)三〇六(9)『福澤諭吉全集』一巻二三~四頁および八巻六二~六四頁。
- 前掲『小幡英之助先生』一九頁。『福澤諭吉全集』十五巻五三四頁および二十一巻三四九頁

 $\widehat{21}$ $\widehat{20}$

- 「福翁自伝」『福澤諭吉全集』七巻二一五頁。
- $\widehat{23}$ マイクロフィルム版『福澤関係文書』(慶應義塾福澤研究セ 『福澤諭吉全集』二十巻四九~五〇頁。 雄松堂フィルム出版有限会社、 一九九七年)**K**15-
- ―ワックスマン博士の寄書について―」参照 雪駄直し屋とのエピソードは、 前掲富田 「小幡甚三郎の死

(一) 小幡篤次郎宛小幡甚三郎書翰 (明治五年四月八日付) 一筆啓上仕候。余寒強ク候処、先ツ以兄上様御始メ中津表

御揃、益御機嫌克被成御座奉賀候。

其

皆々様御揃、益御機嫌能奉賀候。於東京母人様御始メ皆々様

軒アリテ味噌塩ヨリ反物マテアルヤーナモノナリ)トテハ 一ツモ 位ノ人多シ。信(真―筆者註)ニ田舎ノ有様ナリ。気候ハ殊 ン」ノ「カラス」カ第一等テ、「リードル」ノ素読ニコマル 地球玉ノーツナキ位ノ処。書生トテモ算術ハ「フラクショ ルネル」 地ハ殊ノ外田舎ニテ、家数モ二十軒カ三十軒位、日本ノ田舎 ネクチコットノ内ウヰンチエスタルト申処へ参り候処、此ノ ニ日本ノ田舎ノ手習師匠ニ異ナルコトナシ。地図ナドモ「コ トーツモ違フコトナク、学校トテモ只タチープナ已ニテ、実 ヨリ相別れ、廿八日朝ニーヨルク府へ着。三日滞留ノ後コン 日早朝同所出立、ソルトレーキシチニテ日本使節へ追付キ ノ外寒烈 日本ニテ云へハ箱根山ノ如キトコロナリ 店 (使節ハ雪ノ為メ留ルコト殆ント一ヶ月)、チカゴ迄同行。 扨私共事第二月十五日「サンフランシスコへ」着。 一品ヲ買フニモ山路ヲ四里外ニ行カネハ買フコト出来 ノ地図ガーツアルカ無キ位、窮理ノ道具ナトハ勿論! 同十七

ノ外国ニ居ル人タチカ金ヲ不用ニ使フト云コトヲ聞テ、

ス。実ニ不都合無之上地ナリ。

此れハ全ク私カ、日本ノ書生

ター

候次第ニ奉存候。

実ニ人並ニモニー

(マネ

筆者註

恐入 ヲ費

補註

キスホース」

仕候テ、

ク出来コトハナク、

実ニ私ノ「スモールブレイン」 不本意ナガラ書状モ不指上、

ヲ

真 リ□出シタル失策ナリ(余程倹約ヲ守リ候テモ、 ニ五六百両テーヶ年ノ修業カ出来ルト考へタル 八九百両 ノ誤リ

シ、

少クテハ、

日本人ニハ修業難出来奉存候)。

|第三月廿二日ニーヨル府へ着シタリ。 可然場所へ立帰り候方可然ト相考へ、早々取形付ケ、 |週間程色々相考へ申候得共、マケオシミヲ捨テ金ヲ費シ 此ノ時松田君佐藤君 再

--| 君 佐倉ノ佐藤先生ノ子息当国久シクアル人 ヨル ク」府 山ノ人 **ノ川向ヒ「ロングアイラント」ノ内ニアル** ナトノ助ケニテ、 ブルークリン 竹村君 駿府ノ人 即 高 チ

都

府ナリ)へ参り、「ブライベート」ニ先生ヲ頼テ稽古相

ナリ。 Cochran ト申人ハ、 仕候心得ニ御座候。当学校ノ「プレジテント」David H. 始メ申候。 ノ「ブレジテント」ヲ致居候人ニテ、「グートマン」ノ由シ 且ツ日本へ学問ノ要用ナルコト能ク承知シ、別段日本 追々へ Polytechnic Institute ト申学校ニテ稽古 元ト他ノ場所ニテ「ノルマルスクール」

ノ」自由ヲ与候由ニ付、 人へハ世話致シ呉レ、学校稽古ノ都合トテモ「スペシアル 扨当国着ノ節モ早速書状差上ヶ可申之処、 ブレター」「セルヘント」 当地へ落付キ申候。御安心可被下候。 其外色々事多ニテ、何ニー 初旅ノ処ニ「イ

> 御覧可被下候。 連デハ中々凌兼申候。 弁理 (便利—筆者註) 実ニ「インテリオル」 委細ノ様子ハ先生迄申上置候間 ノ地ニ住マ ノ食物ナト ナクテハ、 日本ニ ボ イーサ

テ米ニ魚ヲ添テ食フ方遙カ好キカト考候位ナリ

之時候。 恐惶謹言。

○右ハ乍延引着為御

知申上度、

旁如此御座候。

余

斯後便

第四月八日

郎

平安

兄上様 小 幡 甚

尚々時下折角御用心専

奉存候。

乍憚皆々様

宜敷御

伝言

奉希上候 中津学校ハ如何相成候ヤ。 定テ御思食ト違ヒ候事モ有之候

哉ト相考へ申候。 ト」ニ掛リ候処ハ、心得タル日本人ニテモ、 如何相成候哉。 (真)ニ御失礼ノ事申上候得共、「バンク」 「ソクセズ」ノ程奉願候。 定テ少シハ御運ひニ相成候事と相考申候。 御翻訳 ナトノ如キ 或ルイハ ノ経済書

信

ル

リ候ヨリ、 候。本ノ上ニテ知れキッタヨーナコトガ、 寸申上候間、 左様御思食可被下候。 中ニ不分ズテコマ

「バンク」ノ外国人ニテモ御聞合セノ上、

御翻訳ニ相成度

義モ山 々御座候得共、 後便迄申上ノコシ候

日 月に日本を発った。 本使節とは岩倉使節団のこと。 ソ ルト レイクシティには一八七二年二 岩倉 行は明治四年

月四日に着き、同二十六日シカゴに達した。

二「インテリオル」は interior か。

Elements of Political Economy, の邦訳。 應義塾蔵版で三冊が出版され、同六年小幡氏版として再刻 「御翻訳ノ経済書」 は 「英氏経済論」。WaylandのThe 明治四年に慶

する時に続きの三冊が刊行された。

母および 「皆々様」 宛小幡甚三郎書翰

(明治五年四月九日付)

恐悦之御義奉存候。於中津兄上様御始メ御近親様方 母人様御始メ皆々様御揃、 益御機嫌克被

御揃、

是亦恐悦之御義奉存候

遊御座、

春暖相催申候所、

候間、 其後ハ間モナク全快、 ・ノ 儘 ニ 相認指上候間、 扨私事も前便書状指上候比ハ、丁度不都合ノミノトキ、 御安心可被下候。何れ此ノ次ノ便ノトキ迄ニハ、立派 昨今ハ旧前ノ通りノ甚三郎ニ相成居申 定テ深ク御心配ヲ掛候事と恐入申候。 有

ナ「アメリカ」ッ子ニナツテ写真ヲ指上申候間、写真ヲ御覧

コトニテ、 ナツテ御安心可被下候様呉々奉願候。全ク初旅ノ処へ言語 其上先日中ニ住居候処ハ、余リ田舎ニテ万事不都合故、 連ハ大名連れ、 決シテ真ノ病気テハ無之候間、左様御承知可被 余り心配シ過キテ少シヨワリ候マテ 其

> へハ品川位ノ処)。 テナクナリ大安心仕候。委細ノ様子ハ委シク先生迄申上置候 ナキ地ナリ。此地へ参リ候後ハ、奥平様モ御不快ナトハ決 被相成居候場所、余り繁昌過ル位ノ地ニテ、何一ツ不自由 川向フ「ブルークリン」ト申処へ当時ハ住居候 場所ヲ去リ「ニーヨルク」 此地ニハ日本人モ沢山居り、宮様モ御住居 (日本テ言へハ江戸ノ様ナトコ (日本ニテ云

被下候 お春さんハ如何候哉、青バ□□□□候ヤ御尋申上候。 折角

間、桜井さんニテモ御頼ニ相成ツテ、一寸拝借シテ御聞キ可

候事と奉察候。母人様ハ不相変御元気ト奉存候間、御病気ナ 候哉御尋申上候。 暮シ被下候様奉願候。兄上様御留主、私ハ留主、定テ御淋し トニ付テハーツモ御気遣申上候事ハ無之候。折角御気楽ニ御 奉存候。御姉上様ハ如何被為有候哉。 カト奉存候。御祖母様ニハ、定テ万事御世話ニ相成居候事と 大事ニ御養育可被遊候。 御正月ノ歌留多ハ如何ニ候哉、 併シ衣物ハ余リ衣セ過キヌ方カ宜敷 当時ハ御達者ニ被為有 御集ニ相成

故、定テ御喜ひの事と奉察候。 存候。中津の姉さんやお糸さんハ如何ニ候哉。 此書状御覧済の上、中津の方 兄上様の御出 くハ被為有候事と奉察候。桜井さんニハ日々被為有候事と奉

へ御廻し可被下候様仕たし。

平様ト離れ、 私事モ両三ケ日前より、少シノ都合ニヨリテ暫クノ間 何れ長クモ二週間位也 只今ハ宮様ノ御入込ニ相 ダ奥

之候概為御知申上度、

旁如此御座候

当地ニ参候テハ、中々日本流ニ「ブショーヲスルコトハ出来 楽申候。 トテ御 毎日肉類ノミナレハ、 真ノ御娘さん達ト同シ モノノミナレハ、必ス少シハ肥満シテ、達者ニ相成候事ト相 成居候御医者 少シ心配ニ御座候。 毎朝立派ニ水テ体ヲフキ、「セキケン」ヲ沢山ニ 同ニタベ候事ヲ思ヒ出シ申候。 修業へモ是レカラコソ相掛リ候事ト、 決シテ病気デハナシ 折々御宅テ御膳ヲ戴キ候事や、 御一笑可被下候。食物ハ横浜ヲ去テ後 「テーブル」テ食事シ、不行義モノニ さんノ内へ入込ミ居り、 併シ当地ノ食物好 相楽罷在候。 御酢 使ヒ、

可被下候。右之外申上度義モ山々御座候得は、先ツ無事ニ有方無之。併シ少シハ色男ニ相成候ヤト相楽ミ罷在候。御一笑様、自分ナカラオカシクテカナハナイケレド、風俗ナレハ致様ハ、若イ江戸ノ御娘さんカ御嫁入リテモシタトキノ様ナ有

恐惶謹言

小幡甚三郎

皆々様

過月

九九日

さん桜井さん今泉さん其他何方様へモ、宜敷御伝声奉希上候。尚々時下折角御用心専一ニ奉存候。乍憚安井様麻布御叔母

補註一「宮様」は華頂宮博経。

福澤諭吉」参照。恒次郎の息子信四郎の許へ小幡篤次郎の産運用にも関与している。拙稿前掲「奥平家の資産運用と入社。慶應義塾出版局の中心人物のひとりで、奥平家の資二「桜井さん」は桜井恒次郎。中津出身で慶應三年慶應義塾

三「安井様麻布叔母様」は不明。「今泉さん」次女静が嫁いだ。

は中

津出身の今

泉郡司か。

三)三輪一彦佐々木吉十郎宛小幡甚三郎書翰

日目ニハ替へネハナラヌ。

へネハナラヌ。

御膳ヲタベル有様カラ体ヲ「ミカク」

有

白ノ襟リハ毎日カ或ハ二日ニー度

少クモ飯ノタビニハ洗ハネハナラヌ。白膚衣モ少クトモ三四髪ナトハ一日ニ少クモ四五度位ハツケネハナラヌ。テノ先ハ

扨後ハ申訳も無之御不音仕候条、真平御仁免可被下候。私冷気ニ相成申候処、先以御両家御揃益御安康奉賀候。

事モ不相変医者ニ修業仕候間、

乍憚御安心可被下候

と存候。定テ皆様ニ者、不一方御約介相蒙候事ト奉存候。ニ相知れ大安心仕候。姉事モ此節ハ先ツ全快之由、何寄之事存候。東京へ帰着之後の書状先便ニ相達し、御地御様子委細去冬より愚兄義御地へ罷出候。万事御が介ニ相成候義ト奉

\$存候。右ハ為指□義者無御座候得共、御機嫌奉伺度迄如此帰農商モ弥実地ニ行れ候時節ニ相成、定テ皆様御骨折之義

御

[座候。恐惶謹言。

第九月二十九日

佐々木吉十郎様 尚々寒気ニ向ヒ候間、折角御用心可被成候。

乍末筆皆々様

宜敷御伝声奉御願上候。

四四

神経病院医師ジョンスによる容体書

千八百七十三年第一月三十一日ヒレデルヒヤニて

神経病院医士

ジョンス

シク、絶エス手ヲ顫動シ、又日本語ニて頻りニ譫言ヲ発シ、 れ、精神の働きモ全ク乱レテ其常ヲ変シ、且ツ不安之症候甚

拝啓。小幡君此病院ニ御入院被成候時ハ、己ニ身体大ニ疲

応ニ御給被成候得共、何分腸胃之力なく、是ヲ消化シテ血ト 或ハ其間ニ折々英語ヲ交ヘリ。食物の養とナルヘキモノハ相 ナスコト能ハス。故ニ身体日増衰弱せり。

臓之働きモ日増ニ弱クなり。 て体内の諸道具ニ於て一トシテ其功用ヲ変セサルハナク、心 元来頭脳ノミナラス、脊髄並ニ神経叢ニモ御病気有之。依 随て全身の温度大ニ減少シ、且

著シク筋力の疲労ヲ致せりトモ、不安之症ノミハ決シテ退カ

ス。其死スル二三時ノ前マテ早口ニテ譫言ヲ発セシカ、

衰弱ヲ極メテ、遂ニ御死去被成候。

小幡甚三郎

サルニ至レルカ故ニ、小生始メテ手伝之医士等も、 御病人元来神経ヲ過分ニ労シタレハ、其力衰へ、 其働ヲ遂

ハ深ク心労致候得共、其甲斐なし。残念之至ニ奉存候已上。

<u>E</u>. 小幡篤次郎宛コックラン書翰

千八百七十三年第二月四日 「ブルークランド」ニ而

拝啓。江木氏ヨリ足下ニ呈スヘキ訃音ニ差加エ、寸楮ヲ以

テ足下ノ愛弟小幡君御病死ノ次第ヲ申上候。 然ハ第一ニ申上度ハ、小幡君我国へ御来遊之後、 学問ニハ

成度企望ノ心厚キヨリ、心(欠損)力ニ堪サル程ノ御勉強ニ モ可相成哉と恐ヲ抱ケリ。実ニ日本ノ遊学生ハ、身体健康ノ 無限勉強被成、就テハ必要ナル学問ノ各科ニ於テ、御上達被

ミサレハ、其害ノ来ルコトヲモ弁解致シ、己ニニ個月斗以前 ニモ此人達ヲ集メテ、身体健康ノ為ニハ運動ヲ欠ク可カラス、 法則ニ叛キ可申哉と存シ、小生毎々勉強ニ過テ身ノ養生ヲ顧

殊ニ学問ニ勉強スル時間ヲ定メテ、其間ニ精神ヲ舒暢シ、且 睡眠ノ時刻ナカル可ラサルコトヲ忠告セリ。

等ノ忠告ヲモ等閑ニセンコトヲ恐レリ。却説小幡君御病気ト 然ルニ小生ハ、小幡君カ学問ニ上達セントスル 心ヨリ、

後、 乞へり。 常ナルニ驚キ、 報知ヲ得候ト 「ヒレデルヒヤ」ニ於ケル神経病院へ送リテ療養センコ 両人ノ医師ハ薬ヲ用ヒテ其巧験如何ニ注意イタシ候 直様当国ニテ有名ノ医師二人ヲ迎エテ診察ヲ 小生御病室へ御見舞申候処、 其客体ノ非

+

トヲ勧メリ。 コレハ専ラ神経病ノ治療ニ於テ我国第 一ト申病

全体「ブルークランド」ニ於テモ神経病院一ヶ処有

院ナリ。

為ニハ此国ニテ最上ノ医者ニ掛ケ、 之。療治介抱等モ行届可申候得共、 奥平君申候ニハ、 最上ノ療養イタシ度、 小幡 入 1

IJ 費ハ不苦とノ義ニ付、 、モ「ヒレテルヒヤ」ニ移り候得ハ、 シト申聞ヶ、 且奥平君ノ寛大ナル心ヨリ、 向ノ医師ニモ示談ニ及ヒ候処、 御病人回復ノ望モ多カ 費用ヲ不厭 同人ョ

「ヒレデルヒヤ」ニテ最上ノ療養イタシ度トノ事ニ付、

小生

輩モ御病人ヲ彼ノ地ニ送リ候事ニー決イタシ候。 ニ及ヒ、 然ルニ悲ヒ哉、 身体甚シク衰弱シテ病ノ発作ニ堪ルコト能ハス、 小幡君ハ己ニ人力ヲ以テ救フ可ラサル場合

ヲ恕セヨ。

日ニ当リテ空シクナリ玉エ ニ人事ヲ省ミサルニ至リ、 御令弟御病中ハ、 最上ノ愛恵ヲ以テ御療養至ラサル所 り。 右ノ病院ニ入タル後、 纔カニ第六 ナケ 速

望ニ任セテ、 心ニ快カルヘクト存申候。 V 小生此訃音ノ書の認ルニモ満足致し、足下ニ於テモ御 江木氏日夜御介抱イタシ、 学校ノ教官モ御病床ニ看待イタシ申候。 但シ「ブルークランド」 暫時休息ノ間ニハ御病人ノ 御出立以 又

> ラデルヒヤ」ニ移リシ時ハ、江木氏ト外ニ医師一人付添参り 御病気ノ容子ヲ電信機ニテ、一々小生等ニ報知イタシ 「ヒラデルヒヤ」ニテ名高キ一商人日々右ノ病院へ見

申候。 舞ヒ、 呉申候。

常例ノ礼式相済引導ノ信文ヲモ唱エ候後、 葬スルニ決シ、教官其他数人御国ノ遊学生ト共ニ葬式ヲ送リ ○御死去ノ後「ニウブロンスウイッ + 御遺骸ヲ埋メタリ。 ニ於ケル 墳 地 埋

リ。且又小幡君モ我輩ト共ニ天ノ父ヲ同フスレハ、 墓所ノ傍ニ有之申候。小幡君ノ御世話イタシ候銘々ハ、 御墓ハ御国ノ遊学生ノ中、此迄是地ニテ死去イタシ候三人ノ ノ縁血無之トモ四海皆兄弟ノ縁アレハ、 同情相憐ノ心ヲ尽 我輩ノ死 骨肉

セシトキニモ願ハシキ親睦ノ情ヲ尽セリ。 是書状ハ江木君ヲ為待置相認メタレハ、 冀ク 其粗略

ナ

ル

足下ノ親友

レジテント、 コ " クラン

小幡篤次郎様

御機嫌克、 御三家様御揃、 子) 兄姉妹宛小幡篤次郎書翰 私共無異消光仕候。 益御機嫌克被成御座奉恐悦候。 乍憚御安慮可被成候。 (明治六年四月四日付) 爰許母人様

米国より江木高遠

備後福山士族華頂宮随従ト申

仁並

奥平公より之御書翰ニ、弟義去年三月ブルウクリン府え転居

医薬ヲ要せす。 勉強ヲ節度し運動摂生ヲ主とし極めて壮康、未タ甞て

告を極るニ至ル。今年正月初旬より、神経過敏ニして夜間多 クハ安眠ヲ得す。脳髄之疲労より鬱佶愉快之心なく、良友百 然ルニ去年十一月頃より勉強少しく常度ニ過き、友人の忠

言フ、君之病神経ニ在り。身体ヲ強壮ニすれハ神経之疲労も 六日、江木氏誘ふてスミスと申ス医者ニ至り診察ヲ乞ふ。医 方之ヲ慰ると雖トモ、出行心気ヲ爽ニするを能せす。仍而同

其功験ニて安眠し、且食気も大ニ進ミ候得共、何分神経之疲 癒へ、心自ら愉快ヲ覚ふへしとて、健胃剤及鎮経剤等ヲ与ふ。

労より鬱々不楽、飲食も又候不進ニ相成、医薬其功ヲ奏せす。 逐日衰弱ニ赴候ニ、廿三日学校之大統領コクラン氏ヲ始め、

化ヲ失ひ、飲食も滋養之功なく、名医百方術を尽せども終功 事ニて、愈決議病院え入り候処、追日疲労ハ相増し、胃之消 其費用亦大なれども、

奥平様之思召ニて是非之レへ入よとの 奥平様其他ブルクリン之名医共相談ニて、病院ニ入れ候評議 ニ相成。当時フヒレデルヒヤ之病院ハ合衆国中第一番之所故

験ヲ見す。同廿九日午前十一時過空ク相果て候よし。誠ニ言 病中友人ニ話し候言葉一二ヲ記し参り候 語ヲ絶し、夢之如ク幻之如ク、唯々泣沈十方ヲ失ひ罷在候。 神経之疲労より心思ニ常日ニ変り候故、 遺言等も無之よし。

亜細亜之国風淫風盛ニして人誠実ならす。此風改ラざれ

澤師皆良知明にして、才能人に勝れり。其情懇切にして又決 真の開化ハ入り難し。予若し死せハ、何卒諸君尽力して此浮 風ヲ一掃し、真の開化の域ニ進メヨと。又曰ク、我兄及我福

断あり。我之ヲ敬し之ヲ愛すル実ニ深し。予ハ少しク決断ニ

乏シと雖トモ、正直善良智之明ニして情之親睦ナルコト、我 兄我師ニ次ク可シと。又曰ク、奥平公ハ柔順にして艷しき良 心ある人なりと。又曰ク、予奥平公より戴キタル衣ヲ寝衣と

嗚呼其夜の娯如何ソヤ。何卒斯ル娯ヲ再ヒスルヲ得ンと。 発スルに臨み、我兄我従弟と一夜同床ニ臥し徹宵親語せり。 して病床ニ臥スコト、実ニ難有事なりと。又曰ク、我日本ヲ

仁三郎小幡

日本人

二十六才

(棺の図あり-

千八百七十三年

一月廿九日死

ならてハ相立候儀出来不申候間、来ル六七月之頃迄ハ、延行 メ、花蕚ヲ以て之ヲ積メタリ。墓石之儀ハ、雪之消滅致候後 地の板ニ姓名住居行年月日を刻めり。棺中ニ遺体ヲ安臥せシ 棺の兒図ノ如し。側ニ銀の手八ツ相付、棺の蓋の上ニ、 身の健康ヲ害せざるを肝要とす。 等ニ至るマテ万事無遺憾候得は、

亡弟事も幼少より虚弱之処

御同様ニ天寿と明らめ、

自

せり。

右之次第御同様傷惆無際候得共、療養等残る処尽し、

得共、

母上様ニは甚以御気の毒、

御慰ニも殆と相困り候得共

漸ク健康、

少々学問等も覚へ、死後も人ニ惜まれし様相成候

百までも生存候悪しき弟ヲ持候ニは千百倍も勝り候と、

明ら

申 可仕被相考候御考も御座候ハヽ、後便奥平公迄申上へク候と 中越候

来り、 引受世話あり。ニュウヨルク商人パトン氏病中来訪、 舜海と申ス当時大典医之息子 ヲ以て毎日ニ容体ヲブルウクリンえ報せり。 入り候ハ、同所出店の番頭ヲ朝夕病院え見舞ハしめ、電信機 ニハ学校大統領コクラン氏病中毎日数度訪来、 病中看病等親切ニ致呉候人ハ、江木高遠佐藤百太郎 懇厚ニ世話いたし呉れ、病院ニ送ル抔医者との評議皆 松田晋斎 松山藩義塾同社、 或ハ食物ヲ携 病院ニ 洋人 佐藤

二月廿一日午後第二字、 臥せしメ、綿の布団上ニ枕ヲセシメ、蓋フニ花蕚ヲ以テス。 ニ会するもの皇洋人合せて三十五人、法教師両人葬式を執行 キ府ニ、 シ帰り、此処ニて沐浴屍ヲ清め、 日本政府ニ属せる墳墓地ニ葬ル。此日天気清朗、 屍ヲニュウジェルシ州ブランスウッ 黒色の洋服ヲ着せ棺中ニ安 葬

三十日夜、遺体ヲ病院より同地モールスと申ス人の処え奉

しく候故、必す々々御気遣被下間敷候 め候外ハ無之何とも残念無限候。母上様ハ案外御明らめよろ

御無用可被下候。 書等御被見之後御廻奉願候。且落候方ハ宜敷御知奉頼候。 側ニ御埋奉願候。 庁へも御届可被成下候。又同人初毛臍帯等ハ、尊誠院様御墓 右文章前後いたし御読分兼と奉存候得共、 御推読可被成下候。尚外御近親様へ荒増申 右申上度、 墓ハ当所ニ碑銘ニても建て可申候間、 匆々如是御座候。 何分明精認め 謹言 上候間、 県

得

四月四日 篤次郎

お糸様

姉上様 兄上様

上様より為御知奉仰候。私ニて認兼候間御助力奉仰候 追而叔父様伯母様には為御知申上候得共、 外御近親様え兄

補註一 棺の図については 「書簡から知る福澤諭吉」 『三田評論』

○○一号参照

送葬

(にしざわ なおこ 福澤研究センター -嘱託

163